

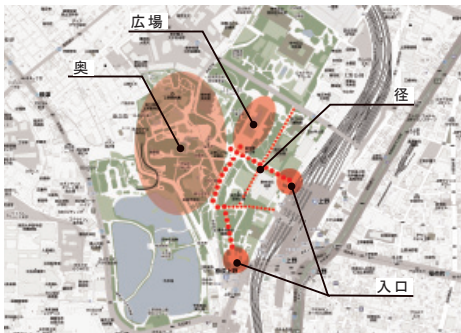
東京調査：上野 文化の森の、夜の顔

2010.06.24/25

三宅博行 + 嵯田晴香

上野駅の北西側に広がる上野恩賜公園は、都心に残る有数の森であると同時に、数多くの美術館・博物館を内包する文化の森である。夏至のほど近い日、喧騒の繁華街に隣接する森の様子を、そして昼の役割が主である文化施設たちが夜はどんな表情をしているのかを調査するため、上野を訪れた。

夜の上野公園には繁華街・森・文化施設から様々な要素が入り混じっているが、大まかにエリア分けすると、駅や繁華街と隣接している「入口」、公園内を網の目のようにつなぐ「径（みち）」、公園の中心である噴水周辺の「広場」、街灯のない闇の中に埋もれる「奥」、の4つに分けることができる。



上野の森、調査対象エリア



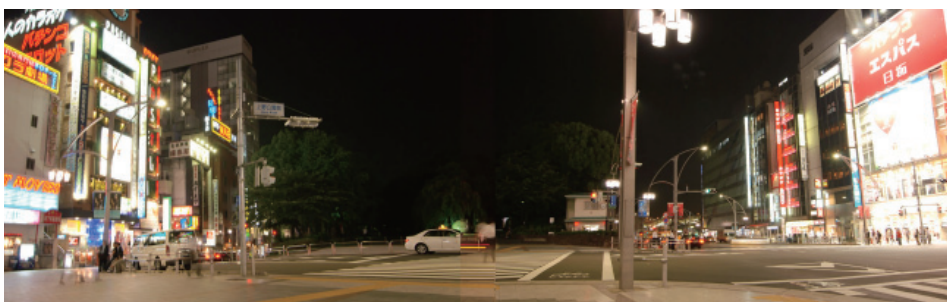
浅草側から街の中で黒い塊と
なっている上野を見る

■入口

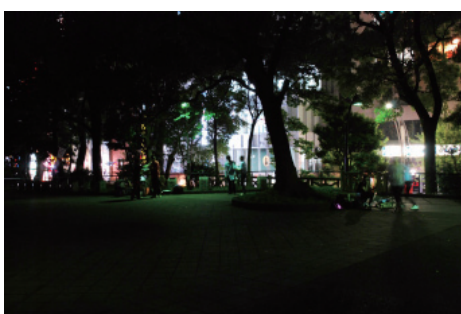
2つの入口公園の主な、京成上野駅側の不忍口とJR 上野駅公園口から公園に入ってみた。

京成側入口は繁華街に東西をV字に挟まれ、繁華街の活発な空気と公園の暗がりの落ち着いた空気が、境界の木々に間に挟んで入り混じる。西側にはおしゃべりに盛り上がる女の子達や、ダンスや演劇の練習をする若者達といった活発に過ごす人、東側には静かに佇む人、と居場所がすみ分けられている。西側には低い植栽と高木が配置されており、木の間から入る街の光が賑わいを感じさせる。仲間同士の姿が認識できる明るさと周囲から少しだけ自分たちを隠してくれる暗さであり、間を空けて立つ高木の幹によって人が居る光だまりには一定の間隔がある。一方西側は密に茂る中高木が街の光をほぼ遮断し、佇む人達は木々の影に自らをかき消しているかのようだ。それぞれの過ごし方に合った人と周囲の距離感ができている。

JR 公園口からは、東京文化会館の下から浮かび上がるように照らされた大庇と星がちりばめられたような天井に引き寄せられながら、手前の木々の暗がりをくぐって行く。そこから公園奥へは庇と同じ高さに、黒々とした木々がパースをかけて奥へと続き、森の深さを感じさせる。建物と森とが一体となって迎え入れるようなアプローチ空間だった。このような文化会館の開館時に対して、閉館時には街路灯を残して文化会館の照明が一切消灯し、公園入口の雰囲気は閑散としたものの一変してしまう。街の賑わいに接する京成上野駅側とは違ったかたちで、閉館時にも都市の公園の入口としての佇まいがほしいと思う。



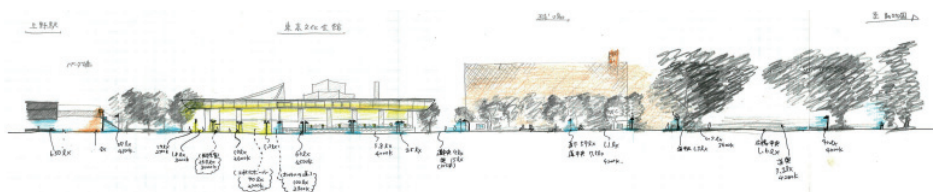
上野の繁華街の間にぽっかりと谷間のような暗がり公園入口からはじまる



京成側入口の西側の、繁華街と公園の境界



JR 側入口。東京文化会館が出迎えてくれる

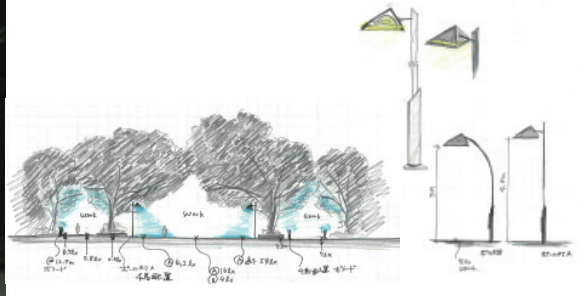


上野駅公園口から東西に上野公園中心部へつく道

■径（みち）

径の路面照度はポール灯直下で50(lx)程度だが、点灯状況にばらつきがあり、1(lx)を切る場所も少なくない。径は4500～4800(K)で照らされ、建物は2800～3500(K)やオレンジ色のナトリウム灯によって照らされている。黒い塊となった木々の隙間から時折見える色温度の低い光に照らされた壁面が公園内でアイキャッチとなる。夜も人の行き交う動線の主軸の径は、路面のみ照らすのではなく、頭上を覆う木々を楽しみながら歩ける照明の方が、都心の森としての意味がより出てくるのではないだろうか。

（峪田晴香）



街路は三本に分かれ、真ん中に千鳥配置でグレアレスのポール灯、両脇にポラードが設置されている

■広場

公園の中心部になると、視界が一気に開ける。噴水を中心に軸線が通り、周囲には美術館・博物館が並ぶもともと都市公園らしいエリアである。繁華街の喧騒はもう届いてこず、昼間は壮麗なイメージの強い日本を代表する個々の建物は、ライトアップされて優美な姿を見せている。だが、少し建物から離れるとそれらの光はすぐに木々の間に埋もれてしまい、広場の景色を構成しているのは、噴水以外は黒々とした木立のみである。せつかくのライトアップがもつたいたないとも思うが、このくらい自然に落ち着いているほうが実際には心地よいのかもしれない。



軸線の終着点にある国立博物館。夜は壮麗な建築が、柔らかくライトアップされて、優美の表情をまとう。



周囲の建築のライトアップの光は届かない。噴水が上がっている時とそうでない時には広場の雰囲気は全く変わる。

■奥

森の奥へとさらに進むと、街路灯などの照明がなくなっていく。足元の全く見えない闇の中、昼間の賑やかさの忘れ物のようなさびしい光がまばらに点在するエリアだ。防犯のためであろうか、青白い光が必要以上に明るく照らし出されている姿が余計に寂しさを感じさせてしまう。人は明るいところに集まる、というのはここでは成り立っていないようだ。

どこまで奥に進んで真っ暗な闇に分け入っても、見上げると木々の間から見えた、明るてちょっと煙ったような東京の空が強く印象に残った。

（三宅博行）



昼は賑やかだった動物園の入口。周囲に比べると明るいが全くの無人で、廃墟に通じる不気味さをたたえている。



照明のある部分がまばらに点在することで、逆にそれ以外の部分は完全に闇に沈む。目を凝らしても足元が見えない。

■都市公園としての上野

上野公園の主な照明は、点在する主要建物のライトアップと、通行、防犯を目的とした径の街路灯の二つだった。建物から離れると他の公園でも見られるような風景に感じられた。噴水広場や径の結節点、径脇のアルコーブのような場所といった公園の中心や人のたまり場となる場所への照明計画をすることで、より都心の憩いの場として、そして日本を代表する公園としての風格ある佇まいとなるのではないだろうか。

そう思う一方で、この都心の中で手を加えていない目を凝らすような暗さを貴重に思う上野の森歩きだった。

（峪田晴香）



不忍池側から上野台地を見渡す。繁華街の明かりの横にひっそりと佇む森の闇の中、弁天堂を照らす強烈なナトリウム灯で空気までオレンジに輝く